

幼児期からの好奇心の発達に関する研究
Curiosity Development from Early Childhood

大学院総合生存学館 総合生存学専攻 氏名 岩寄 唱子

学位論文内容要旨

知的好奇心 (Epistemic Curiosity: EC), すなわち新しい知識を獲得しようとする欲求は, 子どもの認知発達促進に重要と考えられるが, その実証研究はほとんどおこなわれていない。本論文は, 幼児期の EC の測定を試み, 測定された EC と認知機能との関係, 養育者や教師との関係を発達心理学的に検討した。その際, 個人特性とされる特性 EC と, 情報刺激によって一時的に高まるとされる状態 EC の両方またはいずれか一方を用いた。

第 1 章では, EC を駆り立てるとする要因について概観し, 新しい環境を探索する (I-type) EC と, 特定の情報を求めて探索する (D-type) EC に分類する近年の研究の理論について議論する。また, 理論に基づいた EC の評価方法について論考する。

第 2 章では, EC の指標として, 養育者が子の好奇心について質問紙で回答する主観的評価と, 子どもが動作メカニズムを知ろうとしておもちゃを探索する客観的な時間との 2 種類を測定し, それらが認知発達検査の成績と相関するかどうかを調べた。まず, 英語版をもとに日本語版の EC 質問紙を作成し, その妥当性を確認した。3-6 歳の幼児を対象に, 質問紙 (137 名の養育者が評価) とおもちゃの探索時間を調べる実験 (上記の養育者の幼児 36 名が参加, 因果関係が明白なものより曖昧なおもちゃを好むかどうかを測定) とを実施した。その結果, 幼児は曖昧なおもちゃを明白なおもちゃより長く探索することが分かった。また, 曖昧なおもちゃの探索時間割合 (D-type EC の指標) が高い幼児ほど認知機能 (知識) が高いという相関が示された。一方, 質問紙での養育者による EC 評価は, 曖昧なおもちゃの探索割合とも認知機能とも相関がなかった。

第 3 章では, 幼児の D-type EC 行動の発現と実行機能が関連するかどうかを調べた。4-6 歳の幼児 (計 56 名) を対象に, 意思決定場面における情報探索量を調べる実験で EC を測定し, 実行機能を測定する実験課題も実施した。情報探索の課題では, 探索が自由にできる場面 (非コスト条件) と探索のたびに手持ちの資源が減る条件 (コスト条件) の 2 条件が設定された。その結果, 幼児はコスト条件において, 情報探索量を減少させることが分かった。また, 実行機能の 1 つである抑制機能が高い幼児ほど, コスト条件での情報探索量が減少するという相関が示された。

第 4 章では, 養育態度と幼児期・学齢期の子どもの EC が関連するのかどうかを横断研究にて調べた。3-12 歳の子をもつ養育者 (計 244 名) が, 自身の養育態度 (応答性・統制) と子の EC について質問紙評価を行った。結果, 養育態度で応答性が高いほど, 子の EC が高いという相関が示された。また, 学齢期後半 (小学校 4-6 年) では, これらの関係が弱くなることが示された。

第 5 章では, 社会実装として, 教育現場における EC を育む支援について論考した。教師が応答的な態度で子どもの自律性を支援することが EC の育みにつながる可能性から, 教師自身による応答的態度の自己評価モニタリングに使用できる評価ツールを作成した。

第 6 章では, 幼児期からの EC の育みについて, 実証研究から得られた新たな知見を整理した。幼児の情報探索は, 個人の認知能力に応じた適度な情報刺激によって促進される可能性, 幼児期においても, 情報探索を抑制しない環境設定の重要性, 養育者が EC の育みに重要な役割を果たす可能性について論考する。今後の課題として, 実験課題で評価した情報探索が, 実験場面に制約されていること, 特性 EC と状態 EC の関係の解明に至っていないこ

となどを指摘する。最後に、本博士論文の研究結果をもとに、子ども達の「みたい」「しりたい」をどのように支えていくことができるのかについて議論する。

(注) 字数は2000字程度(英語の場合は800語程度)とし、明朝体(英語の場合はTimes New Roman)、11ポイントで作成すること。続紙可。

(学位論文内容要旨の続紙)(氏名 岩寄 唱子)